
湯煙殺人事件

針井 龍郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

湯煙殺人事件

【Nコード】

N7086B

【作者名】

針井 龍郎

【あらすじ】

『海原隼人の事件簿』第一弾。海外から帰国した海原を待ち受けていたのは殺人事件だった。

事件発生

ホームの人混みの中である男が一人歩いていた。中肉中背で肩まである髪は頭の後で結び、前髪は目にかかる程度の長さである。ジーンズにTシャツという服装のその男は左手で大きなスーツケースを引いていた。

彼は海原隼人^{かいほらはやと}28歳。大学を卒業した後、自分探しの旅と称した3年間の海外生活を経て、日本に帰国したのだ。

ここで海原隼人のことを簡単に紹介しておこう。

彼は大阪生まれの大阪育ち。小さい頃から頭が良く、公立中学から公立の有名進学高校に入学。幼稚園の頃からやっていた剣道から高校時代に柔道に転向。3年間で2段までとる。

その後、幼い頃からの夢であった医者になるため、医学部医学科を受験しみごと現役合格。スポーツも続けて柔道3段までとるが、やはり剣道が自分にはあうと考え剣道に転向。その後落第することもなく6年で卒業。医師免許取得。だが医師という職業に疑問をもち、インターンをせず海外へ。3年間暮らすのが両親にこれ以上迷惑を掛けられないと思い、急きよ帰国を決意。現在に至る。

剣道4段、柔道3段という素晴らしい身体能力の持ち主で、高校時代、12人に囲まれたが返り討ちにしたという伝説が残っている。

『大阪弁聞くと大阪に帰ってきたってな気がするなあ』

駅前でタクシーをひろった彼は帰国する前に契約しておいたアパートに向かった。

イチヨウの並木通りを通り、タクシーはどんどん走っていく。駅前の繁華街を通り抜け、かつ5分ほど走ったあたりにそのアパートはあった。築20年ぐらいの古びたアパートは、『月見荘』と言う名前で2階建て、全部で6部屋という物である。

101号室が管理人室になっている。チャイムを鳴らすと50代前半とおぼしき男性が顔を出した。

「はじめまして。海原です。これからお世話になります。よろしくお願いします」

「管理人の藤岡です。立ち話もなんやから中入って下さいよ。家内と娘は今でてよるから」

湯呑みにお茶をいれ、お皿にのせたせんべいをひとしきりすすめた後、藤岡さんはしゃべり始めた。

「駅から自転車で20分ほどかかるし不便なところやけど、まあわからん事があつたら、遠慮せんと聞きいな。出来る限り力になったるから。それよりもあんた5年も外国におつたんやて？若いのにえらいもんやなあ」

「いや、そんな事ないですよ。まだ就職先も決まっていなくて、便なところやけど、まあわからん事があつたら、遠慮せんと聞きいな。出来る限り力になったるから。それよりもあんた決まっていなくて親のすねかじってる身ですかえらそうな事は言えませんわ」

「はっはっは。えらい謙遜すんねんなあ。あんたのその性格気に入ったわ。よっしゃ、あんたの就職先決まるまで、特別に家賃半額にしといたるわ。まあがんばりいや」

「ありがとうございます」

「えーと、あんたの部屋はと…203号室やな。階段上がって右や。引越しの荷物やねんけど、ちょっと遅れて明日になるらしいんやわ。あと、今日は電気とガス通ってないみたいやから気いつけなあかんで」

「はい、どもすいません。おじやましました」

藤岡から部屋の鍵受け取ると、海原は階段を上がっていった。

部屋は3畳の部屋が2つとキッチン、トイレ、小さな風呂と、一人暮らしには十分な広さだった。家具がなにもないので、寒々としていた。

ベランダからは駅前に並んだビルがかすかに見えている。日はすでに傾き、色が次第に変化してきている。

「引越しの荷物が届くのは明日の昼ごろやったよな。テレビもなししやる事もないし、今日はちょっと早いけど近くの銭湯で一風呂浴びてくるかな。たしかタクシーで来るときあったとおもうんやけど。ベランダからも見えてるし歩いていける距離やろっ」

海原はスーツケースからタオルや下着一式を出してカバンに放り込み、ドアを開けて銭湯へと向かった。

アパートから歩いて10分ほどの所にあるその銭湯は昔ながらのつくりになっていて、高くそびえ立つ煙突が印象的であった。海原は番頭にお金を渡すと脱衣場に入っていた。

まだ少し時間が早いからであろうか、海原を入れて6人しか客はいなかった。

70代とおぼしき三人連れの客は幼なじみらしく、仲のよい様子で番頭と4人でしゃべっていた。どうやら常連らしい。話の内容は最近、近所の工場で起こったらしい事故の事だった。

あとの2人は同じ会社の同僚らしく、上司に対する不満をお互いに愚痴っているようだった。2人は海原より先に風呂場へと入っていった。

それからすぐに海原が入っていき、その5分ぐらい後、例の3人連れが入ってきた。その中で一番背の低い人が何か思い出したように風呂場から出ていった。

「ケンさん、どないしたんや？」

ケンさんと呼ばれた老人が振り向きながら答えた。

「石鹸忘れてたんや。ワシももう年やさかいなあ」

なるほど、タライ・タオル持参の割に石鹸が見当たらない。

「いやいや、まだワシら73やで？こんくらいでくたばつとれんわ」

「たしかにな。はっはっは」

しばらくするとケンさんが左手に石鹸を持って入ってきた。三人はよほど仲がいらしく、ずっとしゃべり通しである。楽しそうに風呂に浸かっているのを横で見ていると、ケンさんと話していた人が近づいてきた。

「あんさん見たことない顔やけど、引っ越してきたんかいな？」

人の良さそうなシンさんと呼ばれていた人が話掛けてきた。

「はい、今日近所に引っ越してきた海原といいます」

「そうか、でも喋り方からするとともに大阪の人間やったんやろ？」

「はあ、大学出てから外国に5年いたんですけど、日本では大阪にいました」

「外国！？またえらいもんやなあ？」

「別にそんな事ないですよ。まだ就職先も決まってないですし」

「そんでもワシらにしたらえらいもんやで」

あとの二人も近づいてきて四人でしゃべっていると、例の二人連れが出て行った。あまり長湯はしない主義のようだ。しかし、このお年寄り達の話は長い。そばで聞いているこっちが先にバテてしまっそうである。

『はよ体洗わんとぶっ倒れてまうで』

海原はそう思うと、たらいに湯をくみ椅子に座った。その時、

どさあっ！！！

「どうしたんや？おい橘？しっかりせえや！！番頭さん、電話や！
！警察にたのむわ！！」

切羽詰まった声と番頭さんが警察に連絡する声が聞こえる。

海原が慌てて脱衣場に向かうと、そこには先ほど風呂から上がった二人連れの男の一人がタバコを持ったまま倒れていた。

推理編【その1】

マッサージコーナー兼喫煙コーナーに背を丸めて横向きにその男は倒れていた。連れの男が肩を揺すっているがびくりとも動かない。

「すみません。私に診させてもらえませんか？いちおう医師免許は持ってるんで」

海原はそう言うと、倒れている男のもとにしゃがみ込んだ。脈はすでに無く、うつろな目が見開かれていた。

「残念ながらもう手遅れですね。すでに亡くなっておられます」

「あなたは医者なんですか？」

「いや、訳あってインターンはしてないんで正式な医者ではないんですけどね」

海原はそう言うと、今度は外傷を確かめた。倒れるときマッサージチェアで頭を打ったのだろう、左側頭部から血が少し出ているが致命傷ではない。その他に外傷は無かった。

『こいつは何かの発作が原因で倒れたんやろうか？』

「すみません。さっきこの人の名前呼んでたって事は知り合いなんですよ。この人が何か持病みたいなん持ってたとか聞いたことありませんか？」

海原は隣で立っている男に尋ねた。

「いや、そういったんは聞いたことないですね。ちょっと血圧の高いのは気にしてましたけど、そんなにたいしたことはなかったはずですよ」

「そうですか、どうもすみません」

海原はそう言うと、再び視線を床に倒れている男に向けた。

『いったいなんやねん。なんか他にもつと病気持つてなかったんかいな。そうやなかったら、こんなに突然死ぬわけあらへん』

そのとき、海原はある特有のにおいが男の口元からにおってくるのに気づいた。

『このアーモンド臭……。まさか、死因は青酸中毒？たしかにチアノーゼのような感じも見受けられるけど……。そんならこいつは殺人事件か？』

海原の顔色が変わったのを見て、横に来ていたケンさんが声をかけてきた。

「どないしたんや？なんか顔色悪いで」

海原が立ち上がったそのとき、ジュツという音がしたので見ると海原の髪から落ちた水が半分まで燃えつきたタバコの火を消していた。ふと気づくと、風呂場からあわてて出てきた海原の周りにはすでに水たまりができていた。

海原は慌ててそこから離れると、警察からの事情徴収に備えて服

を着た。周りの者にはこれが殺人事件である可能性がたかいと知らせ、被害者の男性に近づかないように指示した。

彼らは驚き、口々に自分たちの無罪を主張した。

「とりあえず、ここでこういう殺人事件が起こった以上、ここにいる全員が例外なしに容疑者として疑われるんです。いまさらなにを言おうが、真犯人が見つかるまで、もしくは何かしらの原因が発覚するまで」

海原がそう言うと、周りはしんと静まった。全体的に少し落ち着いていったようだ。

2、3分後、救急車とパトカーが到着した。救急隊員が飛び込んできて床に倒れたままになっている男のそばに駆けよった。男の死亡を確認すると、いつの間にか入ってきていた私服警官に報告した。海原は救急隊員の隊長とおぼしき人物に声をかけた。

「すみません。海原隼人と言うものですけれど、死亡した男性の件でちょっとお話ししたいことがあるんで、もう少し遺体はその状態でおいとももらえませんか？」

「はい、分かりました。話をおうかがいしましょう」

二人はいったん銭湯の外へ出た。おもむろに海原が話し出した。

「実はですね、私はあの男性は殺されたんではないかと思うんです」

何かあるとは思っていたようだが、さすがに海原のこの言葉には驚いたようで、しどろもどろで答えた。

湯煙殺人事件

「殺人とは穏やかではないですね。刑事さんも交えて話しましょう」「
そう言うと、警官を呼びに銭湯の中に入っていった。」

推理編【その2】

しばらくすると、救急隊の隊長とともにひよろつとした背の高い無精ひげの私服警官が出てきた。

「私は横溝と言います。殺人事件かもしれないと言ったのはあなたですね？そういう根拠はなんですか？」

「私はインターンは経験してないんで正式な医者ではないんですが、医師免許はとりましたし、医療にたずさわったことのある者として、被害者の男性を診させてもらったんです。そのときできた水たまりがあれなんですけどね」

「医師免許の確認の方は後で本部に連絡してやってもらいましょう。それで、どの点に違和感を持ったんですか？」

海原はゆっくりと言葉を選びながら慎重に話し出した。

「はじめ、私は何らかの発作で倒れたのだらうと推測しました。なぜなら、目立つ外傷がこれといってなかったからです。左側頭部に出血が認められましたがどう考えても致命傷にはなり得ません。おそらく倒れるときマッサージチェアで打ったのだらうと思います」

「たしかにそれだけなら、何らかの発作が原因だと考えるのが普通でしょうね。しかし結論は殺人事件。どういう根拠があるんですか？」

救急隊長が尋ねた。そこで黙っていた横溝刑事が口を開いた。

「結局のところ、あなたはどいう風に考えているんです？なにが死因なんですか？はつきり言ってしまうってください」

一瞬まよった後、海原はゆっくりと話し出した。

「死因は、おそらく青酸カリによる青酸中毒でしょう。アーモンド様の口臭とチアノーゼが確認できました。死斑ができればより確実なんです」

「つまり、被害者は何らかの方法で青酸カリを摂取させられたと、そう言うことなんですね？」

「そうなんですけど、それにしても疑問が残ります。青酸カリは即効性の猛毒です。カプセル等を使って時間差を作り出す事も考えられますが、自殺志願者でないかぎり自分から飲んでしまうことはないはず。被害者が何らかの薬を飲んでいて、何者かがその中に混入したことは、可能性はあっても非常に難しいはず」

三人の間に沈黙がひろがった。そのとき、銭湯の中から警官が一人でてきた。

「横溝刑事、事情徴収を行いますのでおねがいします」

「おう、分かった。すぐ行く。海原さんからも聞きたいことがあるんで、一緒におねがいします」

「分かりました。それでは行きましょう」

海原はそう言うと、横溝刑事の後についてふたたび銭湯の中に入っていた。

事情徴収によって分かったことは以下の通りだ。

まずはその場にいた人物について。

にったひろあき
新田弘明 17歳。アルバイトで7ヶ月前から番頭としてこの銭湯で働いている。被害者の男性とはそれまでに何度かしゃべった事はあるそうだ。

当日の持ち物

黒革の財布（2746円とポイントカード数枚）

他の荷物は従業員用ロッカーにしまつてあつたので、事件当時所持していたのはそれだけである。

たけだのぶや
武田信也 45歳。被害者であるたちばなよしまさ橘義政 44歳の同僚で大学時代から友好関係にあつたらしい。ちよくちよくこの銭湯には来るらしく、先週の火曜日にも二人で来ていた。

当日の持ち物

通勤カバン

仕事関係の書類一式

タオル2枚

バスタオル1枚

シャンプー、リンスのセット

ボデーソープのケース

洗顔料のケース

整髪料のケース

タバコ1箱

しばたけんじ
柴田健司 73歳。通称ケンさん。幼なじみと三人でしょっちゅうこの銭湯に来ていたらしい。被害者男性とは見かけた事はあるがし

やべった事はないそうだ。 当日の荷物

タライ

石鹸、シャンプー、リンスのセット

タオル1枚

バスタオル1枚

老眼鏡のケース

はやしんじろう
林進次郎73歳。通称シンさん。ケンさんの幼なじみ。ケンさんと同じく、被害者の男性とは面識はあってもしゃべった事はないらしい。

当日の荷物

タライ

タオル1枚

バスタオル1枚

ボディースープのケース

カミソリの三個セット

洗顔料

こんだうたつお
近藤辰夫73歳。通称たつちゃん。シンさんと同じくケンさんの幼なじみ。被害者の男性は、家を一軒へだててのご近所さんであり、三人組のなかで唯一被害者の男性と関係のある人物である。

当日の荷物

タライ

タオル1枚

バスタオル1枚

シャンプー、リンスのセット

ボディースープのケース

整髪料のケース

その後の調べで毒物は青酸カリであり、被害者が死亡直前に吸っていたタバコに付着していた物が原因だと分かった。ただ、番頭がそのタバコは被害者が風呂上がりになり自動販売機で買ったばかりの物であると証言したため、容疑者はほぼ完全に海原を含む六人に限られることとなった。

海原は頭をかかえていた。どう考えてもおかしい。いったいどうすれば、自動販売機で買ったばかりのタバコの一本だけに毒薬を塗り付けることができるのか。警察の捜査もそこで行き詰まってしまった。

「もう一度、はじめから考え直そう」

推理編【その3】

海原は脱衣場のイスにすわると、目をつむって精神を集中させ始めた。子供のころからの、彼の考え事をするときのクセだ。

海原のために断っておくと、海原が事件を解決しようと考えたのは別に探偵気取りで捜査に加わろうとか、警察に協力しようと思っただけではない。彼は基本的に警察を嫌っていたし、日本に帰ってきての初日を落ち着かないところで過ごしたくなかった、ただそれだけのことだ。どちらの方が世間では聞こえが良いとかはこの際まったく抜きにして。

彼の直感は犯人が彼を除く容疑者五人のなかにいることを感じ取っていた。ただ一つ、捜査にあたっては警察と同じように、どのようにして買ったばかりのタバコに毒薬をつけたかが分からないのだ。

「ちよつと待てよ。視点を変えれば見えへん事も見えてくるはずや……。考えるべきことはどうやって犯人がタバコに毒薬をつけたんか、と言うことではない。つまり、どういうわけでタバコに毒薬がついたんかという事……。あかん、いい考えやと思たんやけど全然分からん」

海原は伸びをすると、側にいた警官に断って外にでてタバコを一つ買ってきた。海原はタバコをまったく吸わないのだが、これも海原流の考え方の一つなのだ。頭の中で考えるより、実物が手元にあった方が考えやすいものだ。海原の買ってきたのは、被害者が持っていた物と同じ物だった。

「ふむ。箱はフィルムで包装されてんのか……。まったく気づかれんとタバコを1本取り出すことは無理やなあ」

そこへ横溝刑事が現れて、海原の隣に座った。

「死斑ができました。ウチの検察官によると、海原さんの言うとおり青酸カリによる青酸中毒死という可能性が非常に高いそうですね。鮮紅色の死斑がでたんです」

「そうですね」

「そうですね」

横溝刑事がおもむろに切り出した。

「海原さん、たしか青酸カリには非常に扱いにくい性質がありましたよね？少しおうかがいしたいんですけど」

海原は笑いながら言った。

「いいですけど、刑事さんならそのぐらいご存知でしょう？それとも、ただの医学部出身者がこんなこと知ってるんでおかしいと思ってるんですか？」

「まさか、そんな事はないですよ。少なくとも僕は海原さんが無実だと分かっているんです」

海原は目を輝かせて横溝刑事の方に向き直った。

「それはどういった根拠からなんですか？」

「海原さんのロッカーは右端の入り口に近いほうでしたよね？被害者のロッカーは同じ列の左端ですし時間の点から考えても、証言の通りなら誰にも気づかれず犯行におよぶのは不可能です」

「なるほど、そう言うことですか」

海原はふたたびさっきの体勢に戻った。その時、離れぎわに横溝刑事が声をかけた。

「ところで、海原さんはタバコ吸いはるんですか？」

「いや、吸わないですけど。ちょっと気になることがあったんで買ってきたんですが。何か気になることでも？」

「いや、別に大したことじゃないんですけどライターを持ってないみたいなので僕ので良ければ貸そうと思ったんです。吸わないんですしたらいいですね」

「どうもすいません」

海原は返事をする、精神統一をはじめた。今の会話の中に気にかかる言葉があった。しかし、それが何なのかはまたしても海原には分からなかった。しかしその時、突拍子もないことに海原は気づいた。

「そうか、よく考えたらさっきの考え方は間違ってた。タバコに毒薬がついてたんじゃない。元々は手についてたんじゃない。と言うことは、犯人が被害者に毒薬のついた何かを握らせた、と考えたらいいのかな」

海原は手に持ったタバコをもてあそびながらぶつぶつぶやいて
いる。

「もう一度、被害者が倒れていた状況を思い出せ……何かあるはず
……」

もはや光の失われた、うつろに開かれていた目。右手の先には吸
いかけで火のついた（海原が消してしまったが）タバコ。シャツの
ポケットに入っていたライター。左側頭部からの出血。左側を下に
して、体をやや丸めて倒れていた被害者の姿を思い浮かべた。と、
突然海原の頭の中に閃光がきらめいた。

「そつや！ やつと分かった！ なんや足らん思とつたんはそれやつた
んや！」

海原は横溝刑事を呼び止めた。

「すみません刑事さん、調べて欲しい事があるんですけど、しろう
とを満足させるためにとってお願ひできませんか？」

「ええ、いいですよ。元々警察なんてもんは一般住民を納得させる
ためにあるんですから」

「ありがとうございます。恩にきます」

海原は二言三言横溝刑事に伝えると、今一度自分の推理を練り上
げにかかった。時刻はすでに午後10時をまわっていた。うまくい
けば、今日中に家に帰ることができる。

湯煙殺人事件

海原の目は今までとは違っていた。きらきらと、異常なまでに輝いているその目は、彼の脳細胞がフル回転していることを証明していた。

今のところの容疑者である海原を入れた6人が、脱衣場に集まった。みな、それぞれ神妙な顔つきで立っている。それを警官10人がぐるりと取り囲んだ。銭湯の出入り口にも4人づつ見張りに立っている。一応念を入れて、と言うことだった。その中で、海原の目だけが異常なほどきらきらと輝いていた。

「海原さん、皆さん集まっていらっしやるようですし、そろそろお願いします」

「分かりました」

海原はそう答えると、集まった5人に向き直った。一人一人の顔を見回して、それから口を開いた。

「皆さんにこの場に集まってもらったのは、少しだけ私の話を聞いてもらいたいと思ったからです。お時間は大して取らせないようにするつもりです。多くを聞きたくない方がいらっしやったらなら、遠慮なく言って下さい。要点だけをサクツと言ってしまえますから」

海原が尋ねたが、しかし誰一人身動きのできる者はいなかった。

誰しもが、横に立っているだけの警官でさえも 海原のきらきらと輝く瞳に圧倒されていたのだ。

「それでははじめから詳しく話して行きましょう。

まず被害者を観察した時、最初に私が考えたのは何らかの発作が死因であるうと言っことです。これは医者であれば至極当然の事であるので、そこは責めないでもいいのですが」

「ちょっと待って下さい。でも海原さんは、あのとき殺人の可能性が高いとおっしゃいましたよね？」

番頭の青年がおずおずと発言した。若いと言うことで、なかなか対応力があるようだ。海原はそちらに視線を向けて話し出した。被害者の同僚の武田が、海原の鋭い眼光を向けられてたじろいだ。

「私はすぐ、武田さんに発作が起こる可能性について聞いてみました。しかし、被害者の橘さんは少々血圧が高い以外はいたって健康と言うことでした。そこでもう少し詳しく診てみたところ、独特のアーモンド臭とチアノーゼが認められたため、青酸カリによる殺人事件であると判断した訳です。そこまでお分かりいただけただけでしょうか？」

海原はそこで一呼吸おくと、手に持っていたペットボトルから水を一口飲んだ。ケンさんがそわそわと動いた。

「毒物はタバコに付着していたという事でしたが、これには相当悩まされました。どうやっても新品のタバコ一本に毒物を塗るなんて事は物理的に不可能だからです。しかし、これは考え方を変えることで判明しました。どうやってタバコに付けたのではなく、なぜタバコについてしまったのか、と言う事です。答えは明白です。手に毒物がついていたからです。恐らく、もともと毒物のついていた何かを手で触り、その手でタバコを持ったのでしょう」

海原はそこでまた話を区切った。シンさんが、沈黙に耐えられずせきばらいをした。

「ところが、ここで私に疑問が浮かび上がりました。青酸カリのそ

の非常に扱いにくい性質があるからなんです。それは、空気中に放置しておくとも空気中の二酸化炭素と反応して、人体に無害な炭酸力リウムという物質に変化してしまうからです。つまり、風呂上がりに触ってしまうような所にあらかじめ塗っておくことは出来ない訳です。つまり、被害者が倒れる寸前に青酸カリを付着させる以外に方法はないのです。そんな事が出来たのはただ一人、犯人は武田さん、あなたです」

たっちゃんの、はなみずをすすする音がしんと静まり返った脱衣場に響いている。それでも、誰一人としてピクリとも動かなかった。いや、動けなかったのである。

おもむろに武田が笑い出した。乾いたような声で笑いながら、武田が言った。

「海原さん、冗談は抜きにしましょうよ。私が犯人だなんて、まったく冗談もはなはだしい。そのへんで止めないのであれば、名誉毀損罪で訴える事も出来るんですけどね。私としてはそういうことをしたくはないのです……」

今度は海原が笑い始めた。武田はそれを見て顔が引きつった。

「お前が俺を訴えるだあ？はっはっは！やるんやったらやってみろや。冗談も休み休み言いやがれ！！横溝刑事、後たのんます」

「分かりました。よし、武田信治、任意同行としてついてきてくれるか？署の方で詳しい話を聞きたいんやわ」

「ぐっ………それでも証拠があらへんやんけ！そんなんで俺を逮捕できるかあ……！」

海原はそれを聞いてニヤリと笑い、先ほどの口調に戻ってふたたび話し始めた。

「皆さん、よく思い出して下さい。被害者は殺されたときタバコを吸ってたんです。タバコを吸うときに必ず要る物ってなんでしょっか？ライターですよ。」

武田さん、あなたは橘さんが風呂上がりにならずと云っていいほどタバコを吸うのを知っていたはずですよ。何回も二人で来てんですからね。そこであなたはあらかじめ橘さんのライターを抜き取っていったんです。そして、自分のライターを風呂上がりの橘さんに渡したんですよ。青酸カリのたっぷりついたライターをね。」

先ほど横溝刑事にお願ひして調べてもらったんですけど、もの見事に反応が出ましたわ」

海原がそう言うと、武田が必死でそれに食らいついた。額には脂汗がうつすらとにじんんでいた。

「なんでそれが僕のライターやって分かんねん！そこら辺にあった拾いもののライターかもしれへんやんか！それにそれは橘のシャツのポケットから出てきたんやで?!」

「いや、それは確実にあなたの物なんですよ。武田さん、あんたもタバコ吸うのに、なんでライター持ってないんですかね？」

「確かに僕はタバコ吸いますよ。だのになんで僕は貸したライターをすぐ返してもらわへんかったんや？」

「恐らく、橘さんはかなりのヘビースモーカーです。歯にヤニがかなりついてましたから。対して、あなたは吸いたくなった時にたま

に吸うタイプです。くたびれたタバコを持ってましたからね。つまり、橘さんは武田さんからライターを借りてそのままシャツのポケットに入れても、普段からあんたはなんら困らないんです。今回は特にね。自分のライターから青酸カリの反応が出たら、しゃれにならないですから」

武田の顔はみるみる赤くなっていた。しばらく黙っていたが、逃げ出そうと急に体をぐるっと回転させた。しかし、周りに警官がいることに気づくと観念したように横溝刑事に連れられて銭湯を出ていった。かのように思われた。

銭湯の外に出た瞬間に、突然横溝刑事を振り切って走り出した。任意同行という形をとっていたので手錠をしてなかったのだ。

と、その前へこういった事を想定して先回りしていた海原が立っていた。

「おらあ！！どけえ！！死にたいんかおらあ！！」

海原の目がぎらりと輝いた。必死の形相で走っていた武田が海原を突き飛ばそうとした瞬間、武田の体はきれいに宙を舞い、アスファルトの上に叩きつけられた。

エピソード

例の事件から2日後、横溝刑事が海原のアパートを訪ねてきた。事件の件で話があったからだ。

事件の後、解決に貢献したという事で海原は警察署に呼ばれたのだが、彼はその申し出を丁重に断り、自分が事件にかかったことを公開しないよう頼んだ。なので、海原はその後の事をまったく知らないのだ。

武田はあの後、橘を殺したことを白状した。

「橘は、武田が会社の金を横領していた事を偶然知って、その事で武田をゆすっていたらしい。それに我慢出来なくなった武田が、あの日綿密に計画していた殺人を決行したそうだ」

横溝刑事は武田の動機をそう説明した。海原はそれを黙って聞いていた。

「話は変わるけど、海原さんはこっち帰ってきてからまだ仕事決まってるんですよね？出来たら私に紹介させて欲しいんですけど」

「まあ一応話だけでも……」

「そうですね、助かります。医学の知識に堪能でしたっけ。護身もできて頭のキれる人物を雇いたい、探してきてくれ、と知り合いに頼まれました……。ここなんですけどね」

横溝刑事は一枚の名刺を海原に渡した。

『探偵事務所』

所長 大川剛』

「どうぞでしょう、お願いできますか？」

「探偵事務所ですか。まあ結構おもしろそうな所ですし、明日か明後日にでもおうかがいします」

海原の日本での日々はこうして幕をあげたのだった。ただ、それが波乱にみちた日々だと言つ事に海原はまったく気づいてはいなかった。

エピソード（後書き）

どうでしたでしょうか？初投稿なものでまだまだ未熟な点も多いですが、今後ともよろしくお願いいたします。

感想等いただけましたら、今後の執筆活動の励みになりますので、どうぞ書いて下さい。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7086b/>

湯煙殺人事件

2008年11月7日08時50分発行